

利用者の声



石田敬子さん
-奈良町-

夫は初代の運転手
皆親切で居心地の良い場所

移動図書館が始まった初代の運転手は主人でした。今は私が仕事を退職して時間ができたので、10年前から利用しています。時代劇がお気に入り、毎回連載ものを持ってきてもらい、全巻読破に挑戦しています。

図書館員さんはとても親切。利用者同士の触れ合いも楽しいので、居心地の良い場所です。毎月が待ち遠しいです。



川田小学校5年生
(左から 篠原涼司君、大竹惟月君、茂木悠晴君)

毎月楽しみ
来てくれるのが便利

児童書レーベルの角川つばさ文庫がお気に入りの茂木君は「図書館に行かなくても、移動図書館が学校まで来てくれるから便利」と話します。たいいてい2、3冊借りるといふ篠原君は「ミステリーものがお気に入り。待ち遠しい」と笑顔。読書にはまっている大竹君は「漫画や戦闘ものを読むので、持ってきてもらえて嬉しい」と移動図書館の魅力を話しました。



1 新旧の移動図書館車。左が新車両 2 3 新車両の内装。後ろからは車イスが入れる 4 5 旧車両の廃車時に利用者が書いたメッセージは、図書館3階に掲示 6 各ステーションへ運ばれる予約本

マスコットマークはそのまま生かし、デザインを担当した塚田堂鬼さんは「本を通して夢と希望を届けてほしい」と話します。

廃車前の「あかつき号」には、巡回場所を訪れる人が「本を運び続けてくれてありがとう」と名残惜しうにメッセージを残し、これまでの思い出を振り返りました。メッセージは図書館3階に掲示しています。

地域に寄り添う図書館員

移動図書館の利用者は多いところでも30人と、図書館本館に比べて圧倒的に少ないですが、このことがメリットでもあります。「利用者との距離が近いので、何気ない会話を通して、この地域に合った本は何だろうと考えるながら準備することができず。屋外なので少し大きな声で会話が弾むこともあり、それも魅力の

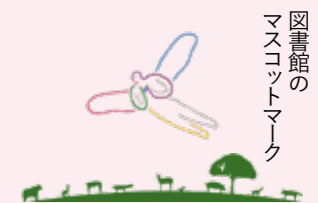
一つです」と図書館員の阿部尚代さん。借りた本は次回の巡回日に返却するため、だんだん利用者が好む本の傾向が分かってくることや、こういった本を読みたいと話してくれることで、読書案内に生かすことができます。「中国の古典が好きで男性がいたので、好みそうな本を持って行くと喜ばれました。全50巻読破の挑戦中に亡くなってしまいました。が、いつも楽しそうに訪れる姿はずっと心の中に生きています」と振り返ります。

移動図書館車には新刊本は多く積まれていませんが、選書する図書館員とより身近に触れ合うことで、一人一人に合った一冊に出合えることが大きな魅力です。人と本をつなぐ出会いの場を目指して、「あかつき号」は今月もどこかの地域に出動しています。



特集1 地域に密着した移動図書館「あかつき号」

人と本をつなぐ出会いの場



図書館の
マスコットマーク



図書館という枠組みを越え、地域に寄り添い本を届け続けてきた移動図書館。各地で図書館が建設されて役目を終えたり、ステーションの確保や図書館の運営が困難で廃止になったりと、現在運行している自治体は県内で2つになりました。人と本をつなぐ役割を担い、貴重な存在になっている本市の移動図書館「あかつき号」に迫ります。

問合せ 図書館 ☎ 22-0551

新車両はバリアフリー対応

平成6年、市立図書館オープンと同時に、これまでのミニバンの移動図書館車を買替え、ワゴンタイプを購入。約26年間、地域に本を届けてきた「二代目あかつき号」は、昨年11月20日の運行を最後に役目を終え、12月に更新されました。

新車両は車イスで入れるバリアフリー対応、車両の両サイドに備え付けたテントは雨よけとして活用するほか、外の開かれた空間でのびのびと本に触れ合えることをイメージして作られました。図書館オープンの際に、市の森林文化都市宣言に基づいてデザインされ、車両に描かれた

スピーカーから流れる「沼田の歌」とともに、公民館や住民センター、小学校などに現れる移動図書館「あかつき号」。森の動物たちと空をかけ巡る少年が描かれたクリーム色のワゴンが、本を積んで市内各地に届けます。

図書館は市街地にあり、遠方に住む車に乗れない高齢者や小さな子どもがいるママさんなど、利用しにくい人へのサービスを広く行き渡らせるために始まりました。現在は月に11日間、45カ所を巡回し、車両に設置された棚には、小説や実用書、絵本など約2500冊が並びます。移動図書館だけで年間1万3000冊が貸し出され、次の巡回までに入れ替えて新しい本を届けています。